

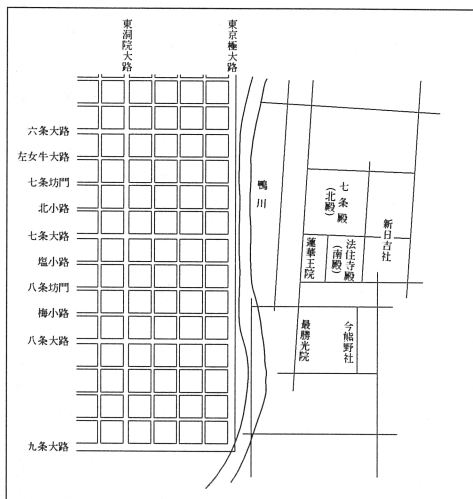
法住寺殿と小松家の武将たち

野口実

はじめに

法住寺殿は十二世紀後半、後白河院によって営まれ、南殿（狭義の法住寺殿、東山殿とも）・北殿（七条殿、馬場あり）などの複数の殿堂のほか、御願寺である蓮華王院・最勝光院、さらに今熊野・新日吉社をとりこんだ広大な都市空間を現出した。

白河・鳥羽につぐ院政期における京外の都市空間としての法住寺殿の政治史的な評価については臈谷寿氏・大村拓生氏、この空間内の殿堂配置については杉山信三氏の研究がある。^①このうち後者については川本重雄氏が異論を提出している。^②杉山説に従え



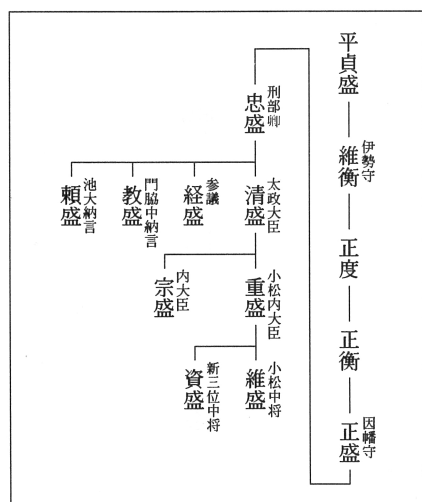
〔地図1〕 杉山信三氏による法住寺殿御所・御堂配置案（川本重雄「法住寺殿の研究」より）

ば、現存する後白河院の陵墓や近年の発掘調査で検出された武将墓は法住寺殿の中心である南殿の郭内に位置することになるが、川本氏によれば法住寺殿南殿は杉山説の南東に位置することになり、陵墓・武将墓はその域外に置かれたことになる。

ところで、私はかつて右の武将墓について、後白河院の近臣にして平家一門の総帥の立場にあった平重盛の墓ではなかったかという推測を述べたことがある^③。これについては、その後の考古学サイドからの指摘によって些か否定的なスタンスをとらざるを得なくなってきたが、しかし寿永二年（一一八三）七月、平家一門都落ちの後、平家嫡流の小松家に仕える有力武将平家貞・貞能父子らが、いったん都に引き返し、重盛の墓を掘り起こしたという『平家物語』の話は、それ自体検討の対象にすべきものである。

すでに、上横手雅敬氏・佐々木紀一氏は『平家物語』における重盛および小松殿の公達（維盛・資盛）に対する虚構の設定を明らかにして平家一門における小松家の在り方に再検討を試みており、高橋昌明氏も上横手氏の指摘をふまえて法住寺殿の南方に隣接する八条・九条末が清盛によって新たな軍事拠点とされる可能性を有していたことを推測している^④。

法住寺殿は北を本来の平家の本拠地である六波羅に、南を清盛が軍事的な新首都を構想したと考えられる八条・九条末に接しているが、後白河院政そのものが平家



〔系図1〕平家系図

の軍事力の存在を前提に成立したことや、『吉記』などに見えるように、寿永二年七月、都落ちの後、いったん還京した小松家の武将たちがここに立て籠って源氏軍と交戦しようとしたり、同年十月、院がここに大軍を集めて木曾義仲軍と戦ったという事実から、法住寺殿それ自体の軍事機能についても検討の余地があるのではなからうか。そしてまた、六波羅から九条末にいたる鴨川左岸、東山西麓のエリア全体についても、それは敷衍されるべきであろう。本稿では、これらの点にも触れながら、法住寺殿の軍事的機能と平家一門のなかで最も院権力に密着していた小松家の武将の動向について考察を深めたい。

一 法住寺殿造宮の背景と六波羅との関係

法住寺殿が鴨東の七条末一帯の地に造営された事情について、棚橋光男氏は平家の六波羅との関係を重視する^③。平治の乱後、乱で近臣の多くを失い、二条天皇と競合関係にあった後白河院がその権力基盤を平家一門に依存したことは元木泰雄氏も指摘するところである^④。

大村拓生氏は、後白河院による法住寺殿の造営が、平治の乱で犠牲となった信西の居地に、乱の首謀者で処刑された藤原信頼の雑舎を移築することで開始されたことに注目して、そこに平治の乱の総括という象徴的意味を見出し、また後白河が鳥羽殿を居所としなかったのは、そこが鳥羽院の国忌が行なわれるなど、死後もその身体と密接に結びついているからであると考え、法住寺殿こそ後白河の身体と結びついた御所であったとした。

また大村氏は、法住寺殿には鳥羽殿と異なり寄人的に所属する人々はみられず、鳥羽殿の経済機能は従来どおり維持されたこと、法住寺殿は六波羅と機能分化しながら一つの政治空間として機能したこと、大番役で上洛した地

方武士を中核とする武士の空間は天皇の居所である閑院にあったことも指摘している。

しかし、法住寺殿の周囲には、院北面に祇候し、治承三年（一一七九）十一月のクーデターで自害した大江遠業の瓦坂の「家」（宿所）や、「のきをきしりて造たりつる」というほどの「人々の家」が存在したことが知られるから（『延慶本』第二本の二十八・『延慶本』第四の二十五）、多くの院近臣や商工業者たちもこの空間に居住していたことがうかがわれ、また、七条末は鴨川を隔ててはいるものの、当時京内で最も殷賑を極めた七条町や最大の莊園領主であった八条院の御所・御倉町に西にわずかな距離でつながっており、鴨川の舟運機能や域内を南北に貫通する大和大路（法性寺大路）の存在からも、経済機能が不在であったとはみることができないように思われる。

さらに六波羅との関係についても、後述するように、『平家』諸本に平家歴代の墓所が法住寺殿周辺に営まれていたことが記されていたり、平清盛の娘徳子が安徳天皇を身籠ったときに里神楽を新日吉社で行なったこと（『山槐記』治承二年十月十九日条）、あるいは、時代は下るが蓮華王院が六波羅に所在したように記す史料が存在することなどから、法住寺殿と六波羅が一体とみられていたという側面はもっと強調されてもよいのではないだろうか。そして、北面・武者所といった院直属の軍勢力も当然その居所である法住寺殿に編成されており、国家的軍勢力として、その比重は相変わらず大きかった。また、後述するように、院の御厩には諸国から貢上された多くの駿馬が飼養されていた。したがって、この段階では、内裏大番役の創設を重視するにせよ、閑院のみを武士の結集核とすることはできないのである。

二 『平家』諸本に見える平貞能らの帰京

平家一門都落ちの後、平家貞・貞能が法住寺殿に引き返したことについて、『平家』諸本は以下のように記している。

a. 『延慶本』第三末「平家都落る事」

六波羅殿とてのしる所は故刑部卿忠盛世に出し吉所也、南門は六条末賀茂川一丁を隔つ、元方町なりしを此相国の時四丁に造作あり、是も屋敷百二十余宇に及へり、是のみならず、北の倉町より初て専ら大道を隔て辰巳の角の小松殿に至まで廿余町に及まで、造営したりし一族親類の殿原及び郎従眷属の住所に至まで、細に是を算れば、屋敷三千二百余宇一字の煙と登りし事、おひた、しなむと云はかりなし、法性寺院内計しはし焼さりければ、仏の御力にて残かと思しほとに、筑後守家貞が奉行にて、故刑部卿忠盛、入道大相国、小松内府已下の墓所共を掘集て、彼堂の正面の間にならへ置て、仏と共に焼上て、骨をば頸に懸て、あたりの土をは川に流て、家貞主従落にけり、此寺は故大相国、父孝養の為、多年の間造営して、代々の本尊、木像と云、画像と云、烏瑟をならへ、金容をましへておわしましつ、莊嚴美麗にして、時に取て並びなし、

b. 『延慶本』第三末「筑後守貞能都へ帰り登る事」

川尻に源氏回たりと聞ければ、筑後守貞能が馳向たりけるが、僻事にて有ければ帰上る。此人々の落給に行逢にけり。……貞能にをひては骸を都にさらすべしとて帰上る。其の勢二千余騎計ぞ有りける。……けさ家々をば皆焼ぬ。なに、つくべしともなく、法性寺の辺に一宿したりけれども、大臣殿已下の人々一人も帰り給わざりければ、小松殿の御墓の六波羅に有けるを、東国の人共が馬の蹄にかけさせむ事、口惜しかるべしとて、墓掘をこし、骨ひろひ、頸にかけ、泣々福原へとて、落行けり。……院の御所には……貞能御所へ推入て、

なにと云事もなく、既に立てられたりける御馬を、かいえりかいえり引出して、即御所をば出にけり。

c. 『長門本』卷第十四「平家都落給事」

法住寺の院内計は暫焼さりければ、仏の御力にて残るかと思ひし程に、筑後守家貞が奉行にて、故刑部卿忠盛、入道相国、小松内府の墓所とをも掘集て、彼御堂の正面の間に並置て、仏と共に焼上て、骨をは首にかけ、あたりの土をは流し、家貞主従落にけり。此寺は故入道相国、父の孝養の為に多年の間造磨て、代々本尊木造と云画像と云、烏瑟を並へ金容を交てましまししか、莊嚴美麗にして時に取て双なし。

d. 『長門本』卷第十四「池大納言都留給事」

貞能に於てはかばねを晒すべしとて帰上る。盛次、景清、同貞能につきて帰上る。その勢二千騎ばかりぞ有ける。……今朝家々は皆焼ぬ。何に着べしともなくて法住寺の辺に一宿す。……其の夜も明けぬれば、貞能御所へをし入て、何といふ事もなく御厩に立られける御馬を、かいえりかいえり引出して、則御所をば出にけり。

e. 『源平盛衰記』卷三十一「貞能小松殿の墓に参る付小松大臣如法經の事」

源氏多田藏人行綱、摂津国を押領して河尻を打塞ぐと聞えし間、肥後守貞能馳せ向ひたりけれども、僻事にて帰り上る程に……貞能は余りに京の恋しく候へは、帰り上りて、敵あらは討死して、同じくは骸を都にさらし侍るへし。敵なくは又こそ帰り参らめとて、只一人都へ帰り上り、法住寺の辺に一宿したりけれ共、人々も引き返し給はず。家々は今朝皆焼き払ひ給ひぬ。ななに付き、いつくに有るへし共覚えさりければ、貞能小松

殿の御墓に参りて、夜深くるまでは忍び音に念仏申し、頓証菩提と回向して後申しけるは、君は加様の事を兼て知し召されて、熊野権現に御祈誓候ひて、疾く失せさせ給ひけるにや。……生きたる人に物を云ふ様に涙を流して申しけり。……其の後墓掘り起し、水に流すへきをは賀茂河に入れ、持たすへきを持たせて、甲斐甲斐敷くは云ひたりけれ共、泣く泣く福原へこそ下りけれ。

f. 『四部合戦状本』巻第七

貞能骸を都に曝すべしとて……法住寺殿辺に返り入り一宿し……小松殿の墓を掘り骨を取りて頸に懸け、泣く、又落つ。

これらのうち、『延慶本』（a・b）には「法性寺」と見えるが、それはc以下の『平家』諸本の記事や『愚管抄』（巻第五）に「此二人（頼盛・資盛）後述するように貞能は資盛に属していた 鳥羽より打返り法住寺殿に入り居りければ」とあることから、「法住寺」の誤りであることは明らかである。ちなみに、aに「此寺」が清盛によつて造営されたというのは法住寺殿内の蓮華王院をさすのであろう（後掲のhを参照）。

また『延慶本』では、いったん都に戻つて重盛の墓を掘り起こした話が重出して、aでは家貞、bでは貞能がそれを行なつており、『長門本』もcに家貞、dに貞能の名が見える。しかし家貞は仁安二年（一一六七）六月二十八日に死去しており（史料綜覧）、a・cの家貞は明らかに貞能を誤つたものである。家貞と貞能は父子で、家貞の祖父貞光が正盛に仕えて以来、平家の「一ノ郎等」としての地位を担つていた。家貞は正盛が白河院に寄進したことで知られる伊賀国韮田庄の政所沙汰人をつとめ、また筑後守に任じて、薩摩の阿多忠景や肥前の日向通良の

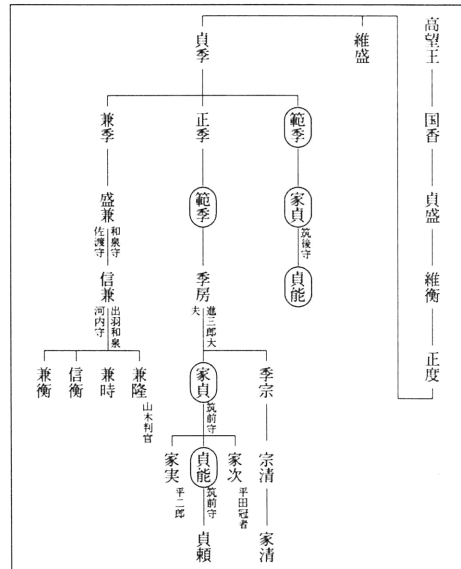
追討に当たった。貞能も清盛の「専一腹心者」で清盛家の家令をつとめ、筑前守・肥後守に任じ、養和・寿永年間の菊池高直らの反平家行動の鎮圧に当たるなど父同様に鎮西の経営で活躍している¹⁰。そうした両者の共通性が混同の原因であろう。

二 帰京の理由

貞能が都に引き返した理由について『平家』諸本は「骸を都にさらすべし」(b)、「余りに京の恋しく候へは、帰り上りて、敵あらは討死して、同じくは骸を都にさらし侍るへし」(c)などと伝えるが、これは当時の貴族ののこした日記の記述からも裏付けられる。

g. 『玉葉』寿永二年七月二十五日条

貞能一矢を射るべきの由を称すと云々。或いは又主上及び剣璽賢所等を具し奉り、鎮西に赴かんと欲す。しかるに臣下無かるべからず。よつて然るべきの公卿を取り具さんが為めなりと云々。怖畏限り無しと雖も、忽ち計略に及ばず。天を仰ぎ運に任せ、三宝を念じ奉るのところ、帰京の武士等、此の最勝金剛院を以て城郭を



〔系図2〕平貞能の一族（『尊卑分脉』）による、
○は重出

構うべきの由、下人來たり告ぐ。

h. 『吉記』 寿永二年七月二十五日条

夕に臨み新三位中将資盛卿（舎兄維盛卿及び舎弟等を率いると云々、今日余人聞かず）及び肥後守貞能八百余騎の軍兵を率い、山崎の辺より引き歸し、蓮華王院に入り住み、源氏に相逢いて合戦すべしと云々。或る説に、然るべき卿相等各虜すべきの由風聞す。洛中重ねて以て騒動し、皆ことごとく逃走す。或る説に、小松内府の子息等歸降すべきの由と云々（申し達せざるの由、後日これを聞く）。又京中を焼き払うの由風聞す。しかれども指せる所為無く、各妻子等を迎え取り、翌日天曙の後、猶以て下向す。其の勢の過半は落ちおわんぬ。真龍先勢の謂いか。

右の g・h によれば、貞能らの歸京の目的としては、上洛して来る源氏軍との戦闘、都落ちに同行させる有力公卿の拉致、さらに小松家の資盛・維盛らの歸降、また京中を焼き払おうとしていることなどの情報風聞していたようで、『平家』の記事はその状況をほぼ正確に伝えているといえよう。

ちなみに、この『吉記』などの一次史料によると、貞能は e の『源平盛衰記』にあるように「只一人都へ歸り上」つたわけではなく、その行動は平家小松家の総帥平資盛配下の一部将としてのものであった。『玉葉』・『吉記』の記事を総合すると、資盛は七月二十一日、院宣によって貞能ら千八十騎の軍勢を率いて田原に向かったが、源行家の軍が大和に入り、これに吉野の大衆が与力したとの情報を得て、一宿した宇治にとどまった。ところがさらに、淀川河尻で摂津源氏の多田行綱らが平家に叛いたために、これを鎮めようと八幡の南を回って河尻に向かったのだ

という。そして、その後の状況の変化によってbに見えるように山崎から都に引き返したのであろう。

それでは、なぜ『平家』諸本では資盛軍の帰京の動きが貞能の行動として叙述されるに至ったのであろうか。これは貞能が資盛の腹心・補佐役であるうえに、この時の軍勢の大部分が前の月に鎮西から上洛した貞能が率いてきた「千余騎」(吉記)十八日条に相当するものであったことによると思われる。

四 院御所と平家

蓮華王院に入った後の貞能の行動も注目し値するものがある。忠盛から重盛に至る平家歴代の墓所を掘り返した話については後述に委ねるとして、ここで取り上げたいのは、bの「院の御所には……貞能御所へ推入て、なにと云事もなく、既に立てられたりける御馬を、かいえりかいえり引出して、即御所をば出にけり」およびdの「其の夜も明けぬれば、貞能御所へをし入て、何といふ事もなく御所^①に立られける御馬を、かいえりかいえり引出して、則御所をば出にけり」の一節である。

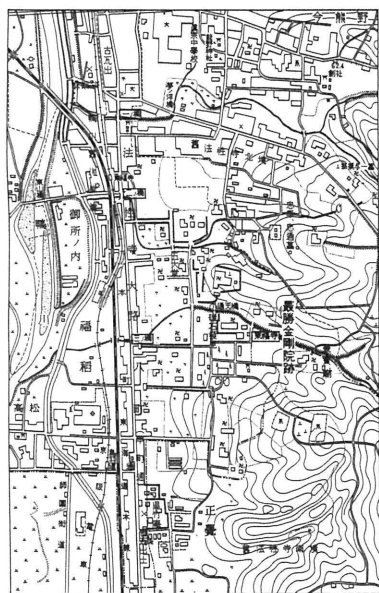
学習院大学史料館に寄託されている「西園寺家文書」の中に「院御所司次第」と題する文書一通があり、木村真美子氏によってその内容の紹介と検討が行なわれている。^①それによると、平家は白河院政期に忠盛が鳥羽殿御所の「預」さらに「別当」に任じて以後、治承四年(一一八〇)十二月に至る間、保元三年(一一五八)八月に任命された藤原信頼を除いて、清盛(二度)・重盛・宗盛・知盛が別当に補され、しかもその間、別当や預の下にあつて院御所の実務を取り仕切った「家主」に、忠盛と清盛の初任のときは家貞、還任後の清盛から知盛までの間は貞能が補されていた。すなわち、貞能は平治の乱後約二十年にわたって「院御所の実質的統轄責任者」の立場にあつたから、^②

法住寺殿御厩の事情に精通し、そこに仕える舎人などの構成員とも実質的な主従関係を取り結んでいたことが想定されるのである。

上横手雅敬氏の指摘されるように、資盛は後白河院の寵臣として、宗盛ではなく、院の命令によって源氏の迎撃に向かったのであり、その帰京の背後には院による保護の期待があったものと思われる¹³⁾。また、養和・寿永年間の菊池高直らの叛乱の鎮圧に従事し、鎮西から数万騎の軍事動員を期待されていたが僅かに千騎ほどしか京都に引率できなかった貞能は、地方における反平家の状況を熟知しており、西海での再起は不可能とみて都落ちの不可能なことを主張したのではなからうか。そこで資盛ら小松家の武将たちは法住寺殿に一宿して院との連絡をはかろうとしたのであろう。しかし、源氏上洛軍が都に肉迫するにいたり、結局かれらは宗盛らに合流する途を選ぶこととなったのである。

ここで注目されるのが、gの彼らが最勝金剛院に城郭を構えて源氏軍の上洛を阻止しようとしているという記事である。貞能が「御厩に立られる御馬を、かいえりかいえり引出し」たのは、彼が都落ちに消極的であったとみられることから、源氏との合戦を企図してのことではないかと考えられるのである。

最勝金剛院は摂関家の寺院である法性寺中最大の堂院で、久安六年（一一五〇）摂政藤原忠通



〔地図2〕法性寺地域付近図（西田直二郎『京都史蹟の研究』より）

の室宗子によって建立されたものである。法性寺の領域は、北は法性寺大路一の橋、南は稲荷山、西は鴨川、東は東山山麓という広大なもので、北の境界は法住寺殿最勝光院に接していたものとみられる。最勝金剛院はその東山山麓の台地先端部に位置したから、大和大路を北上してくる源氏の上洛軍から京都を防衛するための城郭を築くには格好の場所だったのである。八条および九条末の鴨川と東山に挟まれたエリアにたいしては、すでに養和元年（一一八二）初頭の頃から清盛も着目していたところであった。¹⁴ ちなみに、このエリアの軍事的重要性については、早く西田直二郎氏の要を得てすぐれた見解が示されている。¹⁵

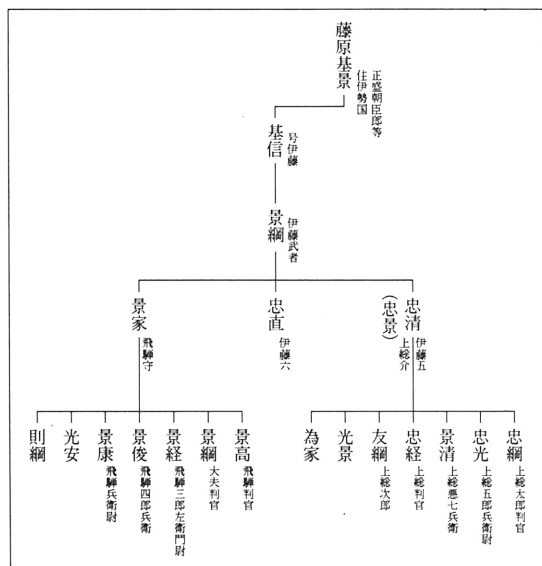
五 平貞能と藤原忠清の去就

貞能は結果的に都落ちをしたが、積極的な意志をもっていなかったことは明らかで、結局、元暦元年（一一八四）十月、平家一門が豊後の武士緒方維采らに追われて九州から屋島に拠点を移した段階で脱落し、翌文治元年七月、頼朝配下の下野の武士宇都宮朝綱の庇護をたより、そのとりなしでゆるされている。

この貞能とよく似た存在が藤原忠清である。彼は貞能が肥後守に任じて鎮西支配を担当していたのと同様に、上総介に任じて坂東の家人を統率する立場にあつたようで、「八ヶ国の侍の別当」（『延慶本』）あるいは「八箇国ノ侍ノ奉行」（『盛衰記』）と呼ばれていた。『歴代皇紀』によると彼は「維盛乳母夫」であり、富士川合戦で維盛を補佐する「次将」（『吾妻鏡』）の役をつとめるなど、資盛と貞能の関係と同じように維盛とセットで活動したのである。『吉記』寿永二年（一一八三）七月二十九日条によると、忠清は平家一門の都落ちに際しては出家して同道しなかったという。彼もまた坂東の状況を熟知する立場から、都落ちの不可なることを認識していたのであろう。

注目されるのは、その後、元暦元年（一一八四）七月のいわゆる「三日平氏の乱」に「忠清法師」が参加していることである。この乱の張本は平田入道家継法師で、家継は貞能の兄にあたる。この時、忠清とともに山中に逃亡した家資も貞能の叔父家季の男であり、この乱の主体が小松家の家人たちであつたことは明らかであろう。

これより前の寿永二年十二月、右大臣九条兼実のもとを訪れた大夫史小槻隆職は、平家と木曾義仲の和平が「忠清法師」によって実現したという情報をもたらしている（『玉葉』二十九日条）。もちろんこれは誤報であつたが、都落ちには従わなかつたものの、忠清が平家のために奔走していたことがうかがえよう。しかし結局、忠清は文治元年（一一八五）五月、志摩国麻生浦で鎌倉御家人加藤太光員の郎等に捕らえられ、京都に連行された後、六条河原で梟首されるのである（『吾妻鏡』）。



〔系図3〕 藤原忠清の一族（西村隆「平氏「家人」表」より）

六 武將墓の再検討

先に掲げた『平家』諸本の記事うち、a・cによれば、都に帰った筑後守家貞は、六波羅からの類焼を免れた法住寺殿に入り、忠盛・清盛・重盛の墓を掘りおこして、「御堂」の正面で焼きあげたといい、またb・e・fによれば貞能が重盛の墓に詣でて骨を掘り起こしたとある。前述のように、この時点で家貞はすでに死去していたから、単純に考えればa・cも貞能の行為とみてよいのかもしれないが、いずれにせよa・cによれば忠盛・清盛・重盛の墓は「御堂」すなわち蓮華王院に近接したところにあったとみることができる。bは同じ『延慶本』でありながらaと矛盾して重盛の墓の所在を六波羅としているが、貞能が法住寺(殿)辺に一宿しているので、その近くであることは変わりが無い。

ところで、平家歴代の墓所について確実な史料からその所在地を確定できるのは、正盛と清盛のものである。正盛の墳墓堂は常光院と呼ばれ、清盛の本邸六波羅泉殿内の巽の角にあった(『山槐記』治承二年十一月十日・同四年三月二十一日条)。正盛は伊勢平氏から発した「平家」の祖として一門の尊崇の対象とされ、その墓所は屋敷墓の形をとったものであろう。清盛の墓については『吾妻鏡』養和元年(一一八二)閏二月四日条に遺骨を「播磨国山田法華堂」に納めたという記事が見える。ここは福原の西郊にあたる交通の要衝で平家の拠点ともなっていたと考えられているところ¹⁵で、『延慶本平家物語』に清盛の墓所を福原とするのにも対応する。

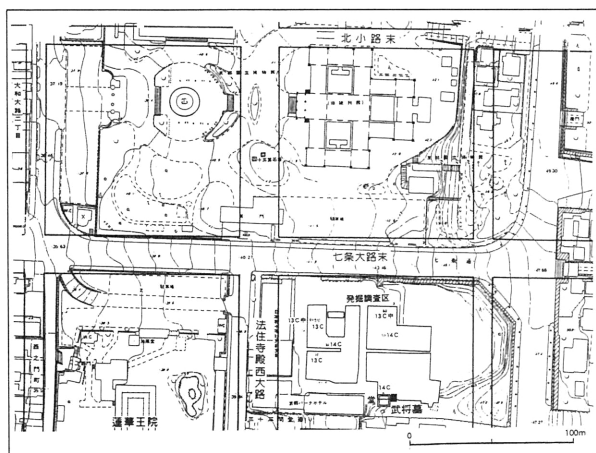
忠盛と重盛の墓所の所在については右の『平家』諸本以外に確かな手がかりは得られない。ちなみに、忠盛の場合、aに「六波羅殿としてのしる所は故刑部卿忠盛世に出し吉所也」とあるように、六波羅は正盛以上に由縁の地であったから、その墓所はこの近くに設定されてしかるべきであらう。重盛についても彼の死去の時点では福原遷

住の構想もなかったから、やはり忠盛同様に考えてよいだろう。なお、養和元年のものとされる四月二十五日付「僧某申状案」〔平安遺文〕三九八二号〕に重盛の遺骨が高野山に納められたことがみえるが、この文書は高野山と平家の関係の深さを強調する目的で書かれているから、おそらくこれは分骨か遺髪・爪のようなものと考えられる。

以上から、清盛の法華堂（墳墓堂）を除いて忠盛・重盛の墓所が法住寺殿の近くに存在した蓋然性はみとめられるものと思う。とくに重盛は男色関係も想定されるほどの後

白河院近臣であり、^⑬ a にも示されているように、その居所小松殿は六波羅の東南隅の小松谷に位置し、平家一門の邸第のなかでもっとも法住寺殿に近いところにあった。小松谷には山科に抜ける苦集滅路（渋谷越、六条末にあたる）が通っていた。^⑭ 法住寺殿・六波羅双方の東の入り口を固めていた重盛の小松殿は、空間的にも政治的にも平家と後白河院の結節点としての役割を担っていたとみることができるのである。

一九七八年、三十三間堂こと蓮華王院の東隣の地にホテルが建設されることとなり、その工事にともなう事前調査がおこなわれたが、その際、鎧・弓矢・馬具などの遺物をもなった約三メートル四方の土壌が検出され、南北方向に木棺がおかれていた痕跡や小白園の検出から、かなり有力な武将の墓所であることが想定された。^⑮ 当初、この墓は法住寺殿合戦



〔地図3〕 武将墓の位置と街路復元図（山田邦和「後白河天皇陵と法住寺殿」報告資料より）

で院方として闘って戦死した武士のものという見方がなされたが、その埋葬形態や墳墓堂が付属していたとみられることなどから、私はその南約百メートル程の所に設定された後白河院の陵墓との関わりを想定して、死後も院を呪術的に守護するほどに武名高く、院と密接な関係をもった有力な軍事貴族が院の生存中に埋葬されたものと考え、『平家』諸本にみえる平貞能の記事もふまえて、これに該当する唯一の人物として平重盛の名をあげたのである。⁽²⁰⁾

その考証過程は旧著に詳述したので、ここでは繰り返さない。ただしその執筆の際、私は法住寺殿の殿堂の配置について杉山信三氏の説に依拠していたので、⁽²¹⁾ 武将墓や後白河院陵を法住寺南殿（狭義の法住寺殿）の域内に属したものとした。しかし、屋敷墓などとの比較を試みてはみたものの、このことには不審の感が拭えなかったのである。ところがその後、川本重雄氏の記録の記事を丹念に精査した研究の存在を知って、南殿の位置が実は杉山説より南東に求められることが判明した。⁽²²⁾ また、山田邦和氏も当時の院の陵墓の形状との比較のうえで、後白河院陵に広い兆域が伴っていたことを指摘するとともに、本来後白河の陵墓として予定されていた建春門院墓の位置を蓮華王院の正面に比定した。⁽²³⁾ これらの研究によって、蓮華王院の東隣の南北二町ほどの空間が院の葬地として用意されていたことが明らかにになったのである。

とするならば、a・cに蓮華王院の正面の間で忠盛以下の遺骸を仏とともに焼き上げたという記述も、その行為はフィクションにしても、空間的にそれはよりリアルさを増したことになり、武将墓の被葬者を平重盛とする私見も些か補強されることになろう。

ところが一方、京都市埋蔵文化財研究所の上村和直氏は、瓦などの伴出遺物の年代比定から、この武将墓は木曾義仲によって焼かれた法住寺南殿が源頼朝によって再建された後（十三世紀代）に営まれたものとみるべきであるという見解を示された。⁽²⁴⁾ たしかに、（財）古代学協会による報告書にも、この武将墓設営の時期を十二世紀中葉から十

三世紀初頭までの半世紀の間としているので、これに矛盾しない。本稿冒頭に述べたように、私が被葬者を平重盛という私見に確信をもてなくなっている所以である。

ただ、発掘報告書では被葬者を寿永二年（一一八三）十一月十九日の木曾義仲による法住寺殿攻撃の際に戦死した院方の武将と推測していて、設営の時期を頼朝による再建後に求めることはしていない。また、その後に発表した私見についても発掘を担当した片岡肇氏（現在は京都府京都文化博物館学芸第二課課長・植山茂氏（同主任学芸員）は否定的な意見を示されなかった。これらの経緯から、武将墓に関する上村氏の見解がペーパーの形で示され、それが考古学サイドでの共通認識とされるまで、被葬者を平重盛とする私見はしばらく撤回を保留しておきたいと思う。それにしても、文献史学の立場からすると、これだけの高級な武器・武具を大量に副葬品とするような武将が十三世紀のこの地に埋葬される可能性は認めがたく、特定の人物の名をあげて別の仮説を提示することは無理であろう。

なお、この武将墓から出土した遺物に関連して重要な発見があったので紹介しておきたい。それは一九九七年度に行なわれた平泉志羅山遺跡第六六次調査においてC地区の池跡から検出された鉄地象嵌の轡である。⁴⁹ この轡は法住寺殿跡武将墓から検出された重要文化財「鶴文銅象嵌轡」と酷似しており、これに対応させれば「鴛鴦文銅象嵌轡」と呼ぶべきものである。京都国立博物館の久保智康氏は、この轡が京都から下向した工人と在地工人の両者の介在によって平泉の工房で製作されたものという推測を示されている。⁵⁰

この轡の検出された池は十二世紀中葉に構築され、十二世紀後半に祭祀の場として機能したというから、法住寺殿跡の轡もこれと同時期かそれ以前のものであることができるであろう。いずれにせよ、この志羅山遺跡の鏡轡は院政期京都文化の平泉への移植を表象するものであり、さらに敷衍すれば秀衡期の平泉の都市整備が法住寺殿をモデルに行なわれたことを示すものとみることができるのである。

むすびにかえて

法住寺殿は院御所としての複数の邸第のほかに、御願寺である蓮華王院・最勝光院、さらに鎮守社である新日吉社・今熊野をとりこんだ広大な領域をしめ、周辺には院近臣の宿所や在家群の存在もみとめられる、白河・鳥羽の発展型として評価されるべき都市空間であった。

この地に後白河院が御所を設定した背景については諸説あるが、後白河院政の基盤が当初不安定で平家との連携が存立の前提であったことを顧慮すると、六波羅と近接していたことがもつとも大きな理由であったと考えられる。新日吉社では院の臨席のもとで院武者所によって競馬・流鏑馬が行なわれることがあり〔吉記〕寿永元年三月十五日条、小五月会でも競馬・相撲が催された。また御所の御厩には各地から集められた多数の名馬が飼養されていた。これらのことから、法住寺殿には明らかに院軍事力結集の場としての性格がみとめられる。

『西園寺家文書』の『院御厩次第』によると、平家は忠盛・清盛・重盛・宗盛・知盛が院厩司をつとめ、この間院御厩案主の地位を家人の平家貞・貞能父子が世襲した。貞能は寿永二年の平家都落ちの後、平資盛ら小松家の公達とともに法住寺殿に引き返し、御厩に繋がれていた駿馬を選び引き出して再び都を落している。木曾義仲・源義経も入京後、院御厩司に任じており、この地位は在京軍事貴族の代表者としての地位を象徴するものであるとともに、駿馬の掌握という実質的な軍事的意味を持ったのである。

平家が院御厩を事実上その管理下においていたことは、六波羅と法住寺殿が空間的にも一体であったことを想起させる。それは『平家』諸本に蓮華王院周辺に平忠盛・清盛・重盛の墓所が営まれていたことがみえることや、治承二年（一一七八）十月十九日、平清盛が徳子の出産に際して「里神楽」を新日吉社で催している事実などからも

うかがうことができよう²⁸⁾（『山槐記』）。

平清盛は福原遷都を断念した後、八条末と九条末の間辺りのちょうど法住寺殿最勝光院の南に接するエリアに軍事拠点を構築しようとした。ここは、東国から大軍が入京しようとする際にどうしても通過しなければならない地点で、鴨川と東山にはさまれた要害である。実際、清盛は最勝光院の南境の「法性寺一ノ橋」と通称される地点の付近に堀をめぐらせた城郭を構築しており、建久七年（一一九六）七月、平知忠ら平家の残党がここに籠城して幕府に反旗を翻している²⁹⁾。また本論に述べたように、寿永二年の都落ちの際にも、平家軍の一部が引き返して法性寺の最勝金剛院に城郭を構えるという情報が流れたこともあった。

中世前期の城郭は主要交通路を遮断する機能をもつもので、武士の居館は河川・山麓・大道などを前提に立地していたという³⁰⁾。すなわち平泉や鎌倉・福原は城郭によつて遮断された空間に存在した要塞都市として評価され、その条件は六波羅・法住寺殿・九条末を含む鴨川の西にして東山の西麓の地にも適合するのである。従来、平家にたいしては貴族的な側面を重視する見方がなされがちであったが、後白河院政の解明や平家一門の族的統制の問題、あるいは近接する時期に造成された平泉などとの比較検討の成果をリンクさせながら、その軍事権門としての側面を評価していくことが今後の課題となるであろう。

注

- (一) 龍谷寿「後白河上皇の院御所、法住寺殿」（同著『平安貴族と邸第』吉川弘文館、二〇〇〇年、初出一九八四年）、同「建春門院の最勝光院 法住寺殿内の御堂」（同、初出一九八七年）、同「新熊野・今日吉社の創建と展開―法住寺殿内の社―」（同、初出一九九三年）、大村拓生「中世前期の首都と王権」（『日本史研究』第四三九号、一九九九年）、杉山信三「法住寺

殿とその御堂」(同著『院家建築の研究』吉川弘文館、一九八一年)。

(2) 川本重雄「法住寺殿の研究」(稲垣栄三先生還暦記念論集刊行委員会編『建築史論叢』中央公論美術出版、一九八八年)。

(3) 拙稿「法住寺殿と武將の墓」(高橋昌明・山本幸司編『武士とは何だろうか』朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす 8、一九九四年)、拙著『武家の棟梁の条件 中世武士を見なおす』(中央公論社、一九九四年)。

(4) 上横手雅敬「小松殿の公達について」(安藤精一先生退官記念論文集『和歌山地方史の研究』清文堂出版、一九八七年)、佐々木紀一「小松殿の公達の最期」(『国語国文』第六七卷第一号、一九九八年)、高橋昌明「平氏の館について―六波羅西八条・九条末―」(『神戸大学史学年報』第一三号、一九九八年)。

(5) 棚橋光男「王朝の社会 大系日本の歴史」(小学館、一九八八年)、同『後白河法皇』(講談社、一九九五年)。

(6) 元木泰雄「後白河院と平氏」(同著『院政期政治史研究』思文閣出版、一九九六年、初出一九九二年)。

(7) 大村拓生「中世前期の首都と王権」。

(8) 拙稿「京都七条町の中世的展開」(『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第一集、一九八八年)、鋤柄俊夫「七条町と八条院町」(同志社大学考古学シリーズIV『考古学に学ぶ―遺構と遺物』一九九九年)。

(9) 『系図纂要』四十八平氏三「平朝臣姓 三浦」に、承久の乱で自害した三浦兼義について「於六波羅蓮華王院」と見える。

(10) 西村隆「平氏「家人」表―平氏家人研究への基礎作業―」(『日本史論叢』第一〇輯、一九八三年)。後述の藤原忠清らの閥歴についてもこれを参照。

(11) 木村真美子「中世の院御厩司について」(『学習院大学史料館紀要』第一〇号、一九九九年)。

(12) 高橋昌明「清盛以前―伊勢平氏の興隆―」(平凡社、一九八四年)。

(13) 上横手雅敬「小松殿の公達について」。

(14) 高橋昌明「平氏の館について―六波羅・西八条・九条末―」。

(15) 西田直二郎「藤原忠平の法性寺及び道長の五大堂」(同著『京都史蹟の研究』吉川弘文館、一九六一年)。

(16) 元木泰雄「平清盛の闘い―幻の中世国家」(角川書店、二〇〇一年)。

(17) 五味文彦「院政期政治史断章」(同著『院政期社会の研究』山川出版社、一九八四年)。

(18) 高橋慎一郎「武家地」六波羅の成立」(同著『中世の都市と武士』吉川弘文館、一九九六年、初出一九九一年) 参照。

- (19) 寺島孝一・片岡肇編『法住寺殿跡 平安京跡調査研究報告 第三輯』（財団法人古代学協会、一九八四年）。
- (20) 拙稿「法住寺殿と武将の墓」、拙著『武家の棟梁の条件 中世武士を見なおす』。
- (21) 杉山信三「法住寺殿とその御堂」。
- (22) 川本重雄「法住寺殿の研究」。
- (23) 山田邦和「後白河天皇陵と法住寺殿」（第一回 平安京・京都研究集会 シンポジウム「後白河院政と法住寺殿―内乱期の都市京都―」（於、機関紙会館、二〇〇〇年九月二四日）における報告）。
- (24) 上村和直「法住寺殿の考古学的調査―地割りを中心にして―」（第二回 平安京・京都研究集会 シンポジウム「後白河院政と法住寺殿―内乱期の都市京都―」における報告）。
- (25) 羽柴直人編『志羅山遺跡第四六・六六・七四次発掘調査報告書 一関遊水地事業関連発掘調査』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第三二二集、二〇〇〇年）。
- (26) 久保智康「鴛鴦文銅象嵌鏡書について―法住寺殿跡出土書との比較を中心に―」（羽柴直人編『志羅山遺跡第四六・六六・七四次発掘調査報告書 一関遊水地事業関連発掘調査』）。
- (27) 木村真美子「中世の院御厩司について」、高橋昌明『清盛以前―伊勢平氏の興隆―』。
- (28) 新日吉社のほか、平家一門は平徳子の安産を祈つて六波羅邸や西八条邸にある旅島神社や平野社・貴布禰社でも里神楽を奉納している（村井康彦『平家物語の世界』（徳間書店、一九七三年）一七九頁参照）。
- (29) 角田文衛『平家後抄』（朝日新聞社、一九七八年）。
- (30) 川合康『源平合戦の虚像を剥ぐ―治承・寿永内乱史研究』（講談社、一九九六年）、岡陽一郎「中世居館再考―その性格をめぐって―」（五味文彦編『中世の空間を読む』吉川弘文館、一九九五年）、中澤克昭『中世の武力と城郭』（吉川弘文館、一九九九年）。

〈キーワード〉

法住寺殿、平家、後白河院